

優秀賞

## 星空に願いを込めて

流通経済大学付属柏高等学校 2年 岸 珠希

「まいにちばばとままとおねえちゃんにあえますように。」

雨上がりの空気が太陽の光に照らされて、蒸し蒸しと息苦しく感じる。そんな七夕の日に家族で田舎にある祖父母の家に来ていた。隣にいる四歳の弟の願いに、子供らしくてかわいいなと思う。私は、笑顔で過ごせますようにというありきたりなことを書いた自分の短冊を飾った。

「どうしてこのお願いごとにしたの？」

毎日会っているのだから、この願いは叶っているのではないかと思いつながら、なんとなく意味が気になって、聞いてみた。

「織姫様と彦星様は、今日しか会えないからだよ。」

自信満々にそう答える弟の言葉で、幼稚園のときに読んだ七夕の伝説を思い出した。天の川を挟んで、織姫と彦星は年に一度、七月七日にしか会うことができないうものだ。たぶん弟は、毎日会えることがどんなに恵まれていることなのかを言いたいんだ。意味がわかった途端、私を見つめてくるキラキラと澄んだ瞳に吸い込まれそうになる。大人になると、いつの間にか、目の前にある素晴らしい世界を忘れ、世の中のほとんどのことを当然であるかのように考える。しかし、弟は、当然を当然とせず、日常の全てに幸せを感じている。毎日会えるって幸せなことだったんだ。どうして今まで、こんなにも大切なことに気づかなかつたのだろう。

「僕のお願いごとの意味わかった？」

そう聞く弟の頭をくしゃくしゃと撫でた。目の前にある素晴らしい世界に気づき、幸せと感じられる人になりたいと思った。歳の離れた弟が、私に大切なことを教えてくれた。

「今日の夜はずっと晴れるといいね。」

夜、無邪気に笑う弟と花火をしながら、空を見上げる。今年も織姫と彦星が会えますように。そして、明日もみんなと会えますように。どこまでも広がる満天の星空に願いを込めて。